

# 「旅びと」における佐藤春夫の抒情

蜂矢宣朗

「旅びと」は、一九二〇年夏、台湾福建を旅行した佐藤春夫が、日月潭を訪れたときのことを書いた、抒情ゆたかな好短篇である。初出は、一九二四年六月『新潮』（第四十巻第六号）であるが、これより先、一九二二年七月、つまり、台湾から帰った翌年『改造』（第三巻第八号）に発表された「日月潭に遊ぶの記」という紀行文がある。同じ日月潭への旅を扱っていて「旅びと」はこれの発展的所産であると思われる。従って「旅びと」における抒情性について述べるには、この紀行文——日月潭に遊ぶの記——から、抒情小説——旅びと——への醸成を辿ってみる必要がある。ただ、前者が紀行文随筆で、後者が抒情小説であるという前提は、本来なら両者を比較検討した上で定めるべきことであろう。今、それを詳かにする余裕がないが、もし、両者を読み比べて頂ければ、このおおよその分類について、おそらく異論は出ないと思われる。（注1）

それでは「日月潭に遊ぶの記」（以下「日月潭」と略称）と「旅びと」とは、どういうふうに違っているであろうか。発表年月については、既述のように、約三年の開きがある。文量は、今かりに『佐藤春夫全集』（講談社刊）によってみるに「日月潭」三八七行、「旅びと」七七六行、行数が正確に文量を示すとは言えないけれども、おおよそ二倍の文量と考えて大過はないであろう。勿論、二倍の文量ということから、単純に「日月潭」にほぼ等量の新しい部分を書き加えたのが「旅びと」であるというような結論を引き出すわけには行かない。何がふえ、何が省かれたか、詳しく検討する必要がある。（注2）

「旅びと」は、十五節からできている。（「日月潭」の方は行あけによって三部に分けられている）その十五の節ごとに「日月潭」と比較してみると、

「日月潭」と同じ風景描写の見える節——二・三・四・六・七・九・十・十一の八節

「日月潭」の描写には関係の無い節——一・五・八・十二・十三・十四・十五の七節

の二系に分けることができる。各節の長さは一様でないから、節の数がほぼ二倍であることが、文量の二倍と一致するわけではないけれども（七節の合計二六七行）この新しく書き加えられた七節の内容は、質的に重要性を持っている。

さて、共通する場面を描いた部分について特徴的なことは「日月潭」において、『台湾名勝旧蹟誌』の引用が三個所に亘っていることであろう。初めは「土地公鞍嶺眺望」次に「日月潭」についての記事、もう一つは「水社化蕃」についての二十行近くの引用である。これらは「旅びと」においても同様な描写が、その表現は平易に書き変えられ、書名も直接引用文も見られない。これは形式的なことではあるけれども「日月潭」の方がより紀行文の色あいの濃いことを示している。日月潭の描写における一例を挙げておこう。

どうして出来た窪地なのだか不明だと地質学者は言ふさうである。

湖齡はたしかにもう一万五千年以上に達してゐて、既に額齡に近い。今から二千年もたてば自然と涸死するだらう、とも言はれてゐるさうな。（「日月潭」）

湖齡はもう一万五千年以上だ。あと二千年もすれば自づと死滅するだらう——さう地理学者はこの湖水を相したといふ。日月潭は、確かに、老病孤愁の相貌を持ってゐる。この水を一たい人間がどうしよ

うといふのだ。(「旅びと」)

前者の説明句調と、後者の心情的表現の差が読みとれよう。

また、小さなことだが、「日月潭」では

私は故あつて——民政長官下村宏氏は歌人である、それ故我我文人を過分に遇してくれたのに因る

と、下村宏の個人名を明記しているのに対し、「旅びと」では

寛大で好奇的な要路の頭官が、公文で命令を出したのだ。——私をせいぜい歓待してやれ! と言つて。

と、下村宏の名を挙げず、しかも一人の登場人物としてある種の態度を以て描いている。

二つの作品は、同一人称「私」を主人公として、「私」のことばとして語られているけれども、「旅びと」は、その冒頭から、ある種のてれを持った小説の主人公として描かれている。それは明らかに作中人物である。それに比べれば「日月潭」の場合の主人公「私」は、単なる一人称の作者そのものであつて、語り手の立場が全く違つていのである

さて「旅びと」における最大の特徴は「宿の女中」についての描写と関心であろう。勿論「日月潭」にも女中は登場する。回数は四回。日月潭の宿に着いたあと客の名刺を持つて取次ぎにくる(二行)。次に対岸の水社に出かける前の情景(二行)。そして舟の中(二行)。最後に同じ舟の中で運送屋のことに答えずに「唯妙に淋しさうに目を伏せて笑つた」ところ(十一行)。この四箇所、何れも「女中」と明記してその動きを書いているけれども、心情的表現の見えるのは最後のところだけである。それが、「旅びと」では登場回数も多く、描写のしかたも、多分に抒情的な様相を示している。

そして「旅びと」に至つて書き加えられた七章の殆ど部分は、この女中に関する描写である。大まかな言い方を許して項けるなら、「日月潭」に登場する女中に関わる十数行の描写部分を拡大して、抒情的物

語風な構成として再編成したのが「旅びと」であると言える。従つて「旅びと」の中から、その女中に関わる部分を抜き出してその描写部分を検討してゆけば、「旅びと」における抒情の秘密は、おのづから明らかになるはずである。

一つだけ原文を引用しておこう。

悪くはない。色が白い。だがそばかすがある。整った顔立で、まるで違ふのに、おもかげがどこか、さつき言つた私の大好きなひとに似ないではないが、だがそれだけの事だ。

「たをやか」で「なよなよとした後姿」の女中は春夫の恋人に似ている。似ているから関心を持つ。しかし、恋人ではないから、女中との間には何も起らない。ただ、全く無縁ではなく、一触即発といった描写も見えるのであつて、その辺の心理的な描写と、日月潭の風景描写とが重なり合つて、風格のある抒情が描き出されるのである。

以上述べて来たことは、あくまでも同じ材料を使って書かれた「日月潭」との比較においてのことである。そこで少し見方を変えて「旅びと」という題について考えておきたい。

第一に、主人公である春夫は「鬱屈する思」(注3)から逃れようと南の島を訪れた旅人である。しかし、春夫が旅人であると同時に、宿の女中もまたある意味で旅人なのだ、ということを見逃してはなるまい。形式的に言えば女中は旅客ではない。しかし、郷里長浜から台湾に来て四年、頼つて来た兄と離れてひっそりと女中ぐらしをする女は、ただ望郷の思いを抱いてはかない運命に生きている。当時の殖民地における内地人は「内地人」という呼称にしみじみ象徴されているように、所詮旅人なのである。たとえ殖民地に骨を埋める覚悟で日常生活を生活していても、心の奥に故郷を潜在させている旅人なのである。

だから、ワキ役として登場する運送屋や監督がこの女中の病み上がり話に「運送屋はどうもあの女のこと何故だか気になるらしい」とい

う感情を抱くのも、同じ旅人としての意識が基盤に存在しているのである。

だからこそ春夫もまた、女の肩に手をふれずに

私の心にふれたものは、それはあの女中ぢやなく、あの女の抱いてゐたその悲しみではないだらうか。

と、魅惑の正体を説き明かしているのである。

さて、最後に、どうしても触れておかねばならぬことがある。それは、春夫の第一詩集である「殉情詩集」に見える「断章」と題する一篇についてである。

さまよひくれば秋ぐさの

一つのこりて咲きにけり

おもかげ見えてなつかしく

手折ればくるし、花散りぬ。

『殉情詩集』の初版は、一九二一年七月、新潮社から刊行されている。先に述べた「日月潭」の『改造』掲載（一九二一年七月）「旅びと」の『新潮』掲載（一九二四年六月）を考えると、この「断章」と「旅びと」の結びの部分との響き合いは決して偶然ではない。

この詩を「旅びと」の情景と照合してみよう。

「さまよひ来れば」は、心に痛みを負うて南の島の旅にさすらう春夫その人の行動である。「ひとつ残りて咲きにけり」と描かれる「秋ぐさ」は、勿論、宿の女中である。「秋ぐさ」に目をとめるのは「おもかげ見えてなつかしく」思うの故である。その「秋ぐさ」を春夫は

たとへば、懸崖にうつぶせに生えて、しかし日を望んで身をねちらせて咲いてゐる花かなどのやうに切なげだった。（「旅びと」）

と譬えている。また「おもかげ見えてなつかしく」は

とぎれとぎれに少しせき込んで口を利く癖があつて、その人に与へる感じには頼りなげな寄りすがるやうな調子がある。顔の上の半分

が自分の好きな或る人に心持似てゐる。（「日月潭」）  
という叙述に吻合する。こう見てくると

旅びとは、道の辺の秋草に、目をとめるよ。さうして私は、嵐の次の朝に碎けてゐる秋草を見たのであったらう。

という、散文ではあるが一種のリズムのある「旅びと」の結びの一文は

手折ればくるし、花散りぬ。

で終わる四行詩「断章」と非常に近い抒情を共有している。嵐に碎けたのと手折られて散ったのとの違いはあつても、散る花を惜しむ詩情は変わらない。つまり「旅びと」における春夫の抒情と、「殉情詩集」における春夫の詩情とは、同じ土壌に培われた草と木のようなものではないだらうか。

春夫の台湾関係の作品では「女誠扇綺譚」を挙げる人が多い。春夫としても自信があったらしい（注4）。その怪奇趣味、異国情緒、推理小説風、といった多彩な筆力に、春夫の多才ぶりが示されている。しかし、一本筋のおとつた抒情という点に基準をおくと、「旅びと」は台湾の旅から得た非常にすぐれた作品といふことができる。それは、春夫が創作の世界で多様な活躍をしていながら、結局、根本的には詩人であったということを実証することになるように思うのである。（70.7.31）

注1 講談社刊『佐藤春夫全集』には「日月潭に遊ぶの記」は第十一巻（随筆紀行）に、「旅びと」は第六巻（短篇小説）に収録されている。

なお、同第六巻の吉田精一の解説には「旅びと」を「これは一種の紀行文ともとれるふしがあり、紀行小説といってよいかも知れない。」と評している。これはつまり、「紀行」である「日月潭に遊ぶの記」を小説化したのが「旅びと」であり、「旅びと」は紀行文の要素を持った小説——「紀行小説」といった評価を下したものと考えられる。

注2 検討の結果の概略を言えば、次のとおりである。

1 「日月潭」で述べられた紀行文的叙述部は、殆んど「旅びと」にも出てくるが、文体は平易になり、感想的要素が多くなり、この部分では「旅びと」の方が多少長くなる傾向がある。

2 風景や対人関係などの情景描写にも「旅びと」の方が詳しくなる傾向があるが、一方で省略短縮する部分もある。

3 「日月潭」になく「旅びと」で書き加えられているのは、殆んど「宿の女中」に関連する場面であるが、一部そうでない部分（案内をしてくれた監督との再会の場面）なども見られる。

注3 この一九二〇年の台湾旅行は、友人東照市に誘われたのがきっかけであるが、春夫は当時、極度の神経衰弱にかかっている、友人の誘いに応じたことが「鬱屈に堪へぬ事情があって、新緑の故山を見ようと帰った。その時、町中でばったり出会ったのは九年振りで見ると君であった。」と「かの一夏の記」に書いている。

注4 春夫は「女誠扇綺譚」について、自信と執着を持って居り、「この作がすぐれてゐるかどうかを、作者はもとより知らない。知り得ない。但、作者はこの作を愛してゐる。さうしてこの作を悪評した評家を甚だ軽蔑する気持になったことは事実である。」と、あとがきに書いている。